

第9回広島湾研究集会

「内湾水産業に関わる多様な物質の輸送 - 浮遊生物から海岸漂着物まで - 」 速報

谷本照己(産総研中国セ)・井関和夫(広大院生物圏科学)・首藤宏幸(瀬戸内水研), 安江 浩(広島水海技セ)

2008年12月19日(金), 広島県情報プラザの多目的ホールにおいて, 標記シンポジウムが開催された。参加者は67名(研究者29名, 行政関係者18名, 漁業関係者9名, 企業団体など11名)が参加した。

今回のシンポジウムでは, 内湾域を浮遊 輸送される様々な浮遊物に焦点を当て, 海洋ゴミや浮遊幼生の動態と水産業との関連について, 広島湾を含めた瀬戸内海における事例を紹介していただき, 意見交換を行った。水産海洋学会・渡邊良朗会長と広島県立水産海洋技術センター長・馬久地隆幸氏による挨拶に引き続き, コンビナーを代表して谷本が趣旨説明を行い, 研究発表を開始した。

セッション1「内湾浮遊・漂着物の実態と水産業との関わり」では, 竹本(NPO 法人宇宙船地球号の会)から, 全国各地で行われているクリーンアップキャンペーンの活動の一環として広島湾の厳島における海岸漂着ゴミの調査結果について紹介され, 広島湾の特徴として水産業関連のゴミの多いことが指摘された。藤井(愛媛大学)は沿岸部に多量に来襲するクラゲ類について, 個体数が急増する大量発生と特定場所に突然集積する大量出現の2つの視点から問題の解決に当たることの重要性を指摘された。松田(東江漁協)は底引き網に入る海底ゴミの実態, 漁協と自治体との協力で10数年前から取り組んでいる海底ゴミ回収状況を紹介され, 旧海軍の遺物と思われる火薬類が現在でも網に入る事例を報告された。漁協関係者でなければ目には見えない貴重な事例を紹介いただいた。谷本は海面浮遊物の海流による輸送経路を数値モデルで計算し, 広島湾北部海域における海洋ゴミやアマモ種子などの海面浮遊物は南部海域や伊予灘に流出する傾向であることを示した。

セッション2「浮遊幼生の動態と水産業との関わり」で

は, 水産業の基礎を支える浮遊幼生を取り上げ, 平田(広島水海技セ)から広島湾におけるマガキ幼生の動態と餌となる植物プランクトンの分布から, 餌量の多い広島湾北部海域の浮遊幼生密度を高めるための母貝筏の配置について提案された。浜口(瀬戸内水研)は内湾域の持続的生産を維持する上でベントスの浮遊幼生の動態調査の重要性と事例を紹介され, 生物種により浮遊幼生が分布する水深や出現時期が異なるため, 生物種毎のきめ細かな動態調査が必要であることが強調された。

総合討論では, 持続性のある水産業について, 内湾域の環境保全と円滑な物質循環の上に成り立つこと, そのためには干潟や藻場に生息する生物, 生物が生息する干潟, 藻場の保全・拡大が重要であることの確認がされた。海洋ゴミについては, 回収のための問題点として自治体が回収しないゴミの処理費用があげられた。広島湾特有の海洋ゴミについては漁業者も回収努力を行っており, 加えて行政, 研究機関, 市民団体が一緒になって取り組んでいくことが地域の重要な産業を持続的に守り育てていくという観点で重要であることが強調された。

